様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　４月　１日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007 ～ 2010
課題番号：１９３２００６１
研究課題名（和文）　**「隣語大方」の新研究－早稲田大学服部文庫所蔵「朝鮮語訳」に着目して－**
研究課題名（英文）　**A new study of Ringotaihou, comparing with Tyoosengoyaku stored in the Hattori Collection, Waseda University Library**

研究代表者
岸田　文隆　(KISHIDA FUMITAKA)
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：30251870

研究成果の概要（和文）：「隣語大方」の所拠資料である早稲田大学服部文庫所蔵「朝鮮語訳」につき、その文献学的・言語学的検討をおこなった。文献学的検討では、本書と対馬宗家文書などとの照合をおこない、本書対話篇巻１が 1710 年頃、巻２が 1737 年頃に成立したものであることを明らかにした。言語学的検討では、本書の朝鮮語かな表記が現実発音を反映したものであり、当時の日本語濁音の鼻音性の有無や、朝鮮語語頭複子音の音価などを伝える重要資料であることを明らかにした。また、本文の翻字データベースを作成した。

研究成果の概要（英文）：In this research we made a philological and linguistic study of the 朝鮮語訳 *Tyosengoyaku* (Korean Translations, 1750), a manuscript stored in the Hattori Collection, Waseda University Library, which was served as a source in the compilation of the 隣語大方 *Ringotaiho*. It was clarified that vol. 1 of this work was made in about 1710, and vol. 2 in about 1737. The Kana(仮名: Japanese alphabet) transcriptions of Korean words in this work are very important materials, by which we can know real pronunciations of Japanese voiced consonants which had nasality, and of Korean consonant clusters which had literal pronunciations yet in the 18th century. We made also a transliterated text of this manuscript.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	3,300,000	990,000	4,290,000
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００９年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２０１０年度	1,300,000	390,000	1,690,000
総　計	7,000,000	2,100,000	9,100,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：隣語大方、朝鮮語訳、かな書き朝鮮語、全一道人、対馬宗家文書、分類紀事大綱、倭館館守日記

１．研究開始当初の背景

江戸時代から明治の初年にかけて、対馬および薩摩苗代川の地において朝鮮語が学習され、幾多の朝鮮語学書が編纂されたことは、ひろく知られた事実であるが、これに関連した資料の一部が今に伝わる。それら資料の多くは、1960 年代に京都大学国文研究室より影印刊行され、朝鮮語および日本語の研究に裨益するところ大なるものがあった。ところで、10 年ほど前から、日本の国内・外において、従来知られていなかった新資料が陸続と発見され、この分野の研究は、新たな局面にさしかかってきている。ことに、それら新発見の資料の中には、それぞれの資料の成立の経

緯を考えるうえで重要な情報を提供するものがあり、各資料の成立論を再検討する必要が生じている。本研究は、このような観点から、当時最も広く用いられていた語学書のひとつである「隣語大方」をとりあげ、このたび新たに発見された写本「朝鮮語訳」に着目しつつ、その成立について検討.考察を加えたものである。

「隣語大方」は、日本においては朝鮮語学書として用いられたが、また、朝鮮においては司訳院より刊行がなされ日本語学書として用いられた。同書の成立については、金沢庄三郎（文献1）、小倉進平（文献2）、安田章（文献3）、福島邦道（文献4）等によって、もともと日本で成立したものであろうとの憶測がなされてきたが、具体的根拠に乏しく、確証の提示には必ずしも成功しなかった。それは、ひとえに、原「隣語大方」よりも古い状態を保っていることが確実な、年代を特定できる関連資料が発見されていなかったという理由による。

ところで、本研究の代表者は、2005 年末、早稲田大学服部文庫に「朝鮮語訳」と題する写本３冊が所蔵されていることを知り、原本を調査する機会を得たが、その結果、この写本が、「隣語大方」と密接な関係を有するものであること、この写本の筆写年代および内容から推して、この写本が「隣語大方」の所拠資料であると考えられること等を確認しえた（文献5）。

早稲田大学服部文庫は、江戸中期の儒学者服部南郭以下８代元彦に至る服部家家伝の蔵書を収めたものである。該写本「朝鮮語訳」は、その筆跡および識語から、服部南郭自身の手により寛延３年庚午（1750）秋に筆写されたものであることが確実である。さらに、本書巻１の本文中に、１）延宝６年（1678）の倭館の移館、２）元禄９年（1696）頃の竹島（欝陵島）一件、３）正徳元年（1711）の朝鮮通信使の準備に関わる例文があらわれることから、本書巻１の成立年代は、さらにさかのぼり、18 世紀初、1710 年頃と推測される。従来知られていた「隣語大方」関連の諸本は 18 世紀後半以降に成ったものばかりであったが、この「朝鮮語訳」はそれらのいずれよりも古いものであり、「隣語大方」の成立史をうかがい知るうえでの重要資料として、また、「隣語大方」がもともと日本において成立したことを示す物的証拠として、位置づけられる。すなわち、「朝鮮語訳」を文献学的・言語学的にさらに詳しく検討することにより、「隣語大方」の成立史を解明する道が開かれたのである。

文献：

１）金沢庄三郎（1933）『濯足庵蔵書六十一種』　東京：金沢博士還暦祝賀会の 13b.
２）小倉進平（1964）『増訂補注朝鮮語学史』東京：刀江書院の pp.434-440.
３）安田章（1963）「隣語大方解題」　京都大学文学部国語学国文学研究室編『隣語大方』解題，pp.1-42．京都：京都大学国文学会.
４）福島邦道（1969）「朝鮮語学習書による国語史研究」　『国語学』76，pp.47-58.
５）岸田文隆（2006）「早稲田大学服部文庫所蔵の「朝鮮語訳」について　―「隣語大方」との比較―」　『朝鮮学報』199/200，pp.1-35.　天理：朝鮮学会.

２．研究の目的

本研究においては、「隣語大方」の所拠資料たる「朝鮮語訳」につき、その文献学的・言語学的検討をおこない、本文の翻字データベースを作成する。具体的作業としては、かな書き朝鮮語本文の解読・その転写システムの解明・その朝鮮語史上における位置づけ、日本語対訳文の解読・その日本語史上における位置づけ、「隣語大方」との対応箇所の洗い出しと両者の比較、「隣語大方」成立経緯の解明とその編纂の意義についての考察等をおこなう。さらに、この資料を、この分野にたずさわる研究者一般が利用できる形でひろく学界に提供するために、本文を翻字してデジタル入力したデータベースを作成する。それらの成果は、向後の朝鮮語および日本語の史的研究のために裨益するところ大なるものがあると確信する。

３．研究の方法

まず、文献学的検討においては、「朝鮮語訳」の文例と対馬宗家文書「倭館館守日記」、「分類紀事大綱」、山川治五右衛門「朝鮮御代官記録」等の歴史記録類との照合をおこない、本書の成立過程を究明した。また、言語学的検討においては、構築したデータベースを駆使し、おもに本書の朝鮮語かな表記について検討し、朝鮮語史および日本語史上の価値について考察した。

４．研究成果

文献学的検討の成果として、「朝鮮語訳」の文例と対馬宗家文書「倭館館守日記」、「分類紀事大綱」、山川治五右衛門「朝鮮御代官記録」を照合した結果、以下のような対応例が発見された。

（以下、「朝鮮語訳」の箇所、対話の話題、対応する歴史記事の日付の順に示す）

巻１：

第 39 条－第 40 条、御米漕船を古館の時のごとく二艘にすべし、元禄８年(1695) 7 月 19 日

巻２：

第 86 条－第 87 条、禁標を建てようとするの

を阻止する、元文１年(1736)12 月 28 日
第 88 条－第 89 条、館守の留館を 36 ヶ月にするようにとの申しこし、元文２年(1737) １月４日
第 90 条、脇乗の船に支給する五日次を 5 日に限るとの通達、享保 19 年(1734)11 月 24 日
第 91 条－第 94 条、第三船の水夫４０人前の加料を支給するや否や、元文２年(1737) ８月頃
第 95 条－第 102 条、父親の死去により別差が上京したあとの宴享の段取り、元文２年(1737) ８月 17 日

これにより、「朝鮮語訳」対話篇巻２の文例のほとんどは、享保 19 年(1734)から元文２年(1737)の史実・歴史記録に対応するものであり、本書巻２の成立年がそれ以降であることが明白となった。よって、本書の成立年は、巻１が 1710 年頃、巻２が 1737 年頃と結論づけることができる。
言語学的検討の成果として、本書の朝鮮語かな表記を同時代の対馬資料である「全一道人」(1729)のかな表記と比較した結果、両者が酷似していること、本書のかな表記が少なからずその当時の朝鮮語および日本語の現実発音を反映したもので、（転字ではなく）転写的性格が強いことが明らかとなった。特に、朝鮮語の語頭複子音の「ㅂ(b)-」、「ㅅ(s)-」に対し小書きのかな「フ#」、「ス#」を当てた例については、その分布が音声的な環境にしたがっていることから、実際の発音をあらわしたものと見られるので、語頭複子音の「ㅅ(s)-」を濃音のダイアクリティックマークと見る通説をくつがえす重要な根拠となるものである。また、本書の朝鮮語かな表記は、当時の日本語濁音の鼻音性の喪失過程や、母音「・」（アレア）の喪失過程、二重母音の短母音化の過程などについても伝えるところがあり、今後の日本語史・朝鮮語史研究の重要資料であると言うことができる。
データベース作成の成果として、「朝鮮語訳」の本文を解読・翻字・入力し、この資料を研究者一般が利用できる形でひろく学界に提供するためのデジタルデータベースを構築した。今後、このデジタルデータベースを利用して「朝鮮語訳」本文の日本語・朝鮮語索引を作成し、解題・本文翻字・索引付き影印本を刊行する計画である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１０件）
①岸田文隆、「朝・日 語学書「隣語大方」の淵源」、『(中朝韓日文化比較研究叢書)日本語言文化研究』1, pp. 65-72．延吉：延辺大学、2010 年、査読有

②朴真完、「朝鮮語訳における母音表記の考察」、『韓国語学』48，pp．131-155．ソウル：韓国語学会、2010 年、査読有

③朴真完、「ロシア東方学研究所アストン文庫のハングル資料－韓国語学習過程との関係について」、『韓国語学』46, pp.199-228．ソウル：韓国語学会、2010 年、査読有

④鄭丞恵、「小倉文庫所藏中村庄次郎資料の韓国語学的考察」、『訪日学術研究者論文集』16，pp．165-226．日韓文化交流基金、2010 年、査読無

⑤岸田文隆、「資料翻字　早稲田大学服部文庫所蔵「朝鮮語訳」対話篇」、『朝鮮語史研究』, pp.161-199．東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2009 年、査読無

⑥鄭丞恵、「『隣語大方』朝鮮刊本의　成立과　撰者에　대하여　-奎章閣　韓國本　書目『西庫書目』에　　據하여-」、『国語史研究』9，pp．239-268．ソウル：国語史学会、2009 年、査読有

⑦ 鄭丞恵、「와세다대학　핫토리문고　소장『조선어역』에　대하여」、『二重言語学』40，pp．153-183．ソウル：二重言語学会、2009 年、査読有

⑧鄭丞恵、「近代 韓國語 教材 <酉年工夫>에　나타나는　‘그녀’에　대한　고찰」、『語文研究』143，pp.31-56．韓国語文教育研究会、2009 年、査読有

⑨岸田文隆、「早稲田大学服部文庫所蔵『朝鮮語訳』の朝鮮語かな表記について　（その１：子音について）」、*Dynamics in Eurasian Languages*, pp.71-102．神戸：神戸市看護大学人文科学領域、2008 年、査読有

⑩朴真完、「朝鮮通信使の日本語観察－語彙研究資料としての《海行摠載》」、『訪日学術研究者論文集』14，pp.257-286．日韓文化交流基金、2008 年、査読無

〔学会発表〕（計１０件）

①岸田文隆、「「朝鮮語訳」にあらわれた別差上京をめぐる対話の日付について －対馬宗家文書 山川治五右衛門「朝鮮御代官記録」に基づいて－」、日韓言語学者会議、2010 年 11 月 13 日、 麗澤大学

②岸田文隆、「「朝鮮語訳」の朝鮮語かな表記について（その２：母音について)」、第２回訳学書学会、2010 年 8 月 12 日、高麗大学(大韓民国)

③岸田文隆、「쓰시마(対馬) 및 사쓰마(薩摩)의 한국어학서 -신자료의 발견과 연구-」、국어학회 창립 50 주년 기념학술대회、2009 年 12 月 18 日、西江大学校(大韓民国)

④岸田文隆、「「全一道人」および「朝鮮語訳」の朝鮮語かな表記についての一考察 ―語頭複子音について」、第 224 回朝鮮語研究会、2009 年 10 月 24 日、大阪大学待兼山会館

⑤岸田文隆、「「隣語大方」の淵源：「朝鮮語訳」と「韓牘集要」」、訳学書学会創立大会、2009 年 9 月 12 日、又石大学校(大韓民国)

⑥岸田文隆、「어학서와 역사기록 –와세다(早稲田)대학 핫토리(服部)문고 소장 「조선어역(朝鮮語訳)」과 대마도종가문서(対馬島宗家文書)와의 대조-」、第３回韓国言語・文学・文化国際学術大会、2009 年２月 12 日、延世大学(大韓民国)

⑦鄭丞恵、「早稲田大学服部文庫소장『朝鮮語訳』에 대하여 -『인어대방』성립론의 재고(再考)」、国語史学会冬期研究会、2009 年１月 30 日、梨花女子大学人文館 111 号(大韓民国)

⑧岸田文隆、「語学書と歴史記録 ―早稲田大学服部文庫所蔵「朝鮮語訳」と対馬宗家文書との照合―」、朝鮮語史研究会、2008 年 12 月 6 日、東京外国語大学ＡＡ研 302 号室

⑨岸田文隆、「早稲田大学服部文庫所蔵「朝鮮語訳」の資料的価値について」、東ユーラシア言語研究会第 13 回例会（司訳院四学の総合的研究に関する会合)、2008 年 6 月 28 日、青山学院大学総研ビル 3 階第 11 会議室

⑩岸田文隆、「「朝鮮語訳」の朝鮮語かな表記について（その１：子音について)」、第 221 回朝鮮語研究会、2008 年 1 月 12 日、大阪大学待兼山会館

〔図書〕（計３件）
①鄭丞恵、「倭學書에 나타나는 日本語注音表記에 대하여」、『崔明玉先生停年退任記念 國語學論叢』pp. 632-655. ソウル：太学社、2010 年

②岸田文隆、「語学書と歴史記録 ――早稲田大学服部文庫所蔵「朝鮮語訳」と対馬宗家文書との照合」 『朝鮮半島のことばと社会――油谷幸利先生還暦記念論文集』, pp.236-268. 東京：明石書店、2009 年

③遠藤光暁・伊藤英人・鄭丞恵・竹越孝・更科愼一・朴眞完・曲暁雲、『訳学書文献目録』、pp.1-253. ソウル：博文社 、2009 年

６．研究組織
(1)研究代表者
岸田 文隆 (KISHIDA FUMITAKA)
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：30251870

(2)連携研究者
小西 敏夫 (KONISI TOSIO)
大阪大学・世界言語研究センター・准教授
研究者番号：20289359
（H19 まで分担者、H20 から連携研究者として参画）

朴 真完 (PARK JINWAN)
京都産業大学・文化学部・助教
研究者番号：90441203
（H19 まで分担者、H20 から連携研究者として参画）

(3)研究協力者
鄭 丞恵 (CHUNG SEUNGHYE)
韓国水原女子大学・人文社会学部・副教授

佐野 三枝子 (SANO MIEKO)
大阪大学・外国語学部・非常勤講師

許 秀美 (KYO SUMI)
大阪大学・外国語学部・非常勤講師